

加古川流域委員会（第1回～第7回）の審議経過

第1回委員会 (H. 20. 7. 16 加古川市民会館)	第4回委員会 (H. 20. 10. 29 西脇市生涯学習まちづくりセンター)	第5回委員会 (H. 20. 12. 18 高砂市文化会館)	第6回委員会 (H. 21. 1. 21 小野市うるおい交流館エクラ)	第7回委員会 (H. 21. 2. 18 加古川市防災センター)
<p><b>流域及び河川の概要</b></p> <p>○流域及び河川の概要 ○治水、利水、環境の現状 ○維持管理、危機管理、地域活動の現状</p> <p>○治水・利水・環境の調和のため、河川の営力を利用する方針とする。 ○水資源を有効に利用しつつ、動植物を次世代へ如何に残すかが重要である。 ○人と川の密接な関係の復元や、先人の知恵を活かした整備とする。</p>	<p><b>治水対策の考え方</b></p> <p>○戦後の洪水について、降雨特性、雨量、流量、浸水家屋、浸水面積を整理し、平成16年10月、昭和58年9月、平成2年9月の3洪水を目標とすべき規模の大きな洪水として選定する。</p>	<p><b>おうけつ 甌穴</b></p> <p>○大門橋付近の河床には、<sup>おうけつ</sup>甌穴群（渦流によってできた穴）があり、貴重な地形を形成している（兵庫県RD地形C）。 ○洪水が安全に流下できないため、貴重な地形である<sup>おうけつ</sup>甌穴を保全した河道掘削を行う。</p>	<p><b>堰堤</b></p> <p>○加古川にある堰（古新堰堤、加古川堰堤、河合頭首工）の建設は古く、老朽化している。</p> <p>○堰は上水道、工業用水、農業用水の取水のために利用されているため、現在の利用目的を損なわず、堰の可動化や統合を含めた検討を行う。</p>	
	<p><b>河川環境</b></p> <p>○瀬・淵、わんど・たまり、水際植生、ヤナギ、礫川原、中州などが全川に見られる。 ○魚類が遡上している環境を守って行く必要がある。</p>	<p>○生活様式の変化に伴う人為的な伐採の減少や河床の<sup>かくらん</sup>攪乱の低下などによりヤナギは樹林化した。 ○ヤナギは、生態系における役割を担っている。 ○カワウなどのねぐらになる。</p>	<p><b>河道内樹木</b></p> <p>○洪水を安全に流下できないなど治水上の問題や安全確認ができないなど維持管理上の問題がある。 ○ヤナギを適切に管理するため、決められたエリアを全伐採する輪伐を行い、順応的に管理する。</p> <p>○地域の方々と協働で樹木管理を行うとともに、河川営力を活用したメンテナンス負荷の小さい河道管理を目指す。</p>	
<p><b>第2回委員会 (H. 20. 8. 27 現地視察)</b></p> <p><b>現地視察</b> 干潟、堤防の整備状況、加古川大堰、桜つつみ、闘竜灘、激特事業箇所</p> <p>○闘竜灘は洪水対策が必要であるが、歴史や文化があり、大切な観光資源である。</p>	<p><b>干潟</b></p>			
	<p>○河道掘削は、どこかを掘削すると他の場所で土砂が貯まったり洗掘されたりする。掘削を行う場合には、干潟の状況などの様子を見ながら徐々に行う必要がある。</p>	<p>○加古川の干潟はヨドシロヘリハンミョウなどの貴重な動植物を含めた多様な動植物が生育・生息し、干潮時には陸地になりヨシ群落が繁茂している。 ○加古川の干潟は兵庫県で最も東に位置し、近畿地方で最も価値がある。</p>	<p>○航空写真や経年的な縦・横断面図の比較では干潟は同じ場所にある。 ○順応的管理としてモニタリングに基づいて掘削していく。 ○モニタリングの結果を一般の人々が分かるような仕組みを考えていく。</p>	<p>○干潟のある河口付近は洪水が安全に流下できないため、みお筋を掘削して河口干潟を保全する。 ○河道掘削は部分的な掘削と動植物の調査や物理的な調査を繰り返し、地域で活動している方々との協働や環境学習との連携を視野に入れた管理を行う。</p>
<p><b>第3回委員会 (H. 20. 9. 25 加古川市防災センター)</b></p> <p><b>河川整備内容の検討方法</b> ①整備の方向性の提示 ②実現のための検討メニューの設定 ③考えられる具体策（複数）の提案</p> <p>○長期的な目標を定めた河川整備基本方針が平成20年9月16日に策定した。 ○基本方針に基づいて今後20～30年後の整備内容を示し、これに基づいて実際の工事を実施していく。</p>	<p><b>水際植生</b></p> <p>○ヨシやツルヨシが繁茂する水際植生はほ乳類、鳥類、昆虫類などの多様な生物の生息場になっている。</p>	<p>○水際植生は極力保全し、堤防の安全度と高水敷利用に配慮し、緩やかな勾配による平水位以上の河道掘削を実施する。なお、水際植生を掘削する場合は順応的な管理を行う。</p>	<p><b>順応的管理</b></p> <p>○地域を市民と行政と一緒に管理するエリアマネジメントの視点が重要であり、このエリアマネジメントの観点から河川を市民と一緒に管理することが望ましい。</p> <p>○順応的な管理として一応の基準（河道内樹木であれば樹高や伐採面積など、河道掘削であれば掘削箇所や掘削深さなど）を決めて、その後モニタリングで徐々に修正していく発想が必要である。</p>	
	<p><b>闘竜灘</b></p>			
	<p>○闘竜灘の滝のような流れは、加古川を代表する景観となっている（兵庫県RD地質・地形B）。</p>	<p>○闘竜灘は物流の集散地・中継地として町が形成されるなど、舟運で栄えた歴史がある。</p>	<p>○闘竜灘（露岩部分）は川幅が広いものの、直上流にかかる闘竜橋では川幅が狭く、洪水が安全に流下できない。</p>	<p>○闘竜灘（露岩部分）は保全し、それ以外の高水敷を一部整正することで原風景に戻す。</p>
	<p><b>堤防整備</b></p>			
	<p>○加古川では概ね8割の堤防があるものの、堤防が整備されていない地区もある。これらの地区では洪水時に浸水被害が発生している。</p>	<p>○上流で川幅が広く下流で川幅が狭くなるとボトルネックになる。そういった場所に住宅が密集している区間があり、今後の対応を検討する必要がある。</p>	<p>○無堤区間では平成16年でも洪水被害が発生しており、川幅が狭い区間では築堤とともに、川幅を広げるなど、対応を考えていく必要がある。</p>	<p>○堤防の未整備地区は堤防を整備する必要があるとともに、川沿いに家屋が連担している地区では町づくりと一体となった整備を行う。</p>